滑稽俳句論壇　38
滑稽句とペーソス①

小林英昭

もし、チャップリンが例の山高帽、どた靴、ステッキ姿で馬鹿馬鹿しい演技をし、人を笑わせるだけの役者だとしたら、はたして、世界の喜劇王とまで言われたであろうか。後年、あれほどまでの名声と快哉を得たであろうか。スクリーンを通して、あれほど観客からの共感と称賛を得たであろうか。ここでは否と、とりあえず言っておこう。

さて、よく話を展開させるため導入部分に使われがちな手で恐縮だが、ペーソスを電子辞書で引くと、ペーソス〈pathos〉哀感。哀愁。悲哀。→パトスと出る。さらに、そのパトスを引くと、パトス〈pathos（ギリシア）〉〔哲〕（原義は「蒙る」の意）苦しみ・受難、また感情・激情などの意。エートス（性格）のように恒常的でない代りに、一瞬のうちに何かを生みだす契機になる。と出る。ついでに「滑稽」も引いておこう。(「滑」は乱、「稽」は同の意。知力にとみ、弁舌さわやかな人が、巧みに是非を混同して説くこと。また、「稽」は酒の器の名。酒が器から流れ出るように弁舌のとどこおりないこととともいう）①おもしろおかしく、巧みに言いなすこと。転じて、おどけ。道化（どうけ)。諧謔（かいぎゃく)。懐風藻「弁正法師…性―、談論に善し」。②いかにもばかばかしく、おかしいこと。「本人は大真面目だが、はたから見れば―だ」（＊なにもわたしはいたずらに原稿量を増やしているのではありません。念のため。筆者。）

今回、滑稽句とペーソスを語るについては小林一茶の句を借りようと思う。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

そこで、引用ついでに、いまひとつの引用を許されたい。

作家藤沢周平に一茶と言う小説がある。〈…略〉一茶の句を記した紙の上から顔をあげると、成美（筆者注、一茶が昵懇にしていた江戸の俳人）は奇妙な笑いをうかべて一茶を見た。そして言った。「不思議ですなあ。あなた、年は幾つになんなすったか」「前にも金令舎さんにそう聞かれました。去年のことですが……」と一茶は苦笑いして言った。「今年は四十三です。まさに馬齢です」「四十三。そうですか、大体そんな見当だろうと思いましたが、そこが不思議ですな」「いまになって句が変わって来ましたな。二、三年前あたりから見えていたことだが、どうも本物らしい。ご自分では、どう考えていなさる？」「さようですな……」一茶は首をひねり、さっと赤い顔になった。「少し変わったかもしれません」「感想をのべてもよろしいかな」「どうぞ。そのつもりでお見せしたのですから」「貧乏句が多くなった」成美はそう言い、珍しく声を立てて笑った。前からそのことを指摘したかったらしく、少し興奮しているように見えた。「あなたが貧しいことは、天下にかくれもない事実でな。貧をうたう句が出てきても、いっこう不思議ではない。しかし以前の句は、つつましくて哀れでしたな」〈略〉、「ところが、近ごろはぶしつけに貧しさを句にするようになりましたな。秋の風乞食は我を見くらぶる、梅が香やどなたが来ても欠茶碗、あるいはここにある……」成美は持っていた紙を指でつついた。「板塀に鼻のつかへる涼哉といった句です。待てよ、去年の句には、我庵の貧乏梅の咲にけり、というのもありましたな」あれは感心しませんでしたな、と成美は少し厳しい顔で一茶を見た。成美は驚くほど正確に一茶の句を諳んじていた。「これを要するに、あなたはご自分の肉声をだしてきたということでしょうな。中にかすかに信濃の百姓の地声がまじっている。そこのところが、じつに面白い」「……」〈略…〉。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。